

# 猫袋遺跡の道路跡

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所 谷地 薫

## 1 猫袋遺跡発掘調査の概要

### (1) 遺跡の概要

遺跡名：猫袋遺跡（まみぶくろいせき）

所在地：横手市雄物川町今宿字猫袋 地内

猫袋遺跡は、横手市雄物川町造山地区の東端に位置する（第1図）。造山地区は、北流する雄物川の右岸に形成された標高49～51mの河岸段丘上に集落の中心部、造立神社、県立雄物川高等学校等が立地し、段丘の東側に広がる沖積地には石持川が北流している。南東部の廻館地区から猫袋地区にかけては、石持川の旧河道が段丘東縁部を浸食して形成した帯状の低地帯が南北に蛇行して延びている。

猫袋遺跡は、雄物川高校と石持川の現河道の間に挟まれた南北約300m、東西約250mの範囲である。遺跡内の地形は西側の低位面と東側の高位面に二分される。南、東、北の三方を石持川に囲まれた標高49～50mの高位面は、西側の低位面によって雄物川高校が立地する段丘面とも切り離され、独立丘陵状の地形となっている。低位面は、南北約300m、東西70～100mの範囲で、標高約48.8mである。低位面は、段丘と高位面の間旧河道が埋没したことによって形成された地形と推測されるが、この地形が形成された時代については不明である。

### (2) 調査に至る経緯

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所では、史跡払田柵跡内の調査に加え、「払田柵跡関連遺跡の試掘調査等」も実施している。関連遺跡とは、払田柵跡の実態解明に不可欠な「雄勝城」をはじめ、寺院・官衙・集落・生産施設・墓地等である。具体的な調査は、平成17年度の実地踏査に始まり、雄勝郡・旧平鹿郡のうち羽後町と横手市雄物川町を対象とした。この地区には8世紀代の古墳・須恵器窯跡・集落跡が集中する。平成17・18年度の踏査を経て、平成19年度に横手市雄物川町造山地区で試掘調査を実施した。以後、造山地区では平成23年度から28年度まで及び令和元年度・3年度に試掘調査を行っている（第1図）。

### (3) 調査の概要<sup>(註1)</sup>（第2図）

調査期間：第1次調査 令和元年11月5日～15日

第2次調査 令和3年11月2日～12日

調査面積：第1次調査 N-1 トレンチ13㎡、N-2 トレンチ16㎡、N-3 トレンチ58㎡ 合計87㎡

第2次調査 N-4 トレンチ20㎡、N-5 トレンチ19㎡ 合計39㎡

調査協力：地権者の方々、造山町内会、造山の歴史を語る会、雄物川町文化財保護協会、横手市教育委員会、横手市雄物川地域局

令和元年度の第1次調査は、高位面3か所（N-1～3トレンチ）の試掘調査を行った。古代の遺構では、N-1トレンチで南北方向の溝跡1条、N-3トレンチで東西方向に平行する溝跡2条、竪穴状遺構1基、土坑1基を検出した。遺物は8世紀中葉の須恵器坏、土師器坏・甕、埴埴、土製紡錘車等が出土した。

N-3トレンチのSD01溝跡とSD30溝跡は平行しており、両溝跡の芯々で10mの間隔を有する。当該地区から石持川を挟んだ対岸では、平成18年度に圃場整備の立ち会い調査で東槻遺跡が発見されており、同様の溝跡が2条検出されている。横手市教育委員会の協力により、両遺跡の遺構の配置図を合成したところ、これらの溝跡は同一軸線上に乗ることが判明した。

令和3年度の第2次調査は、東槻遺跡、猫袋遺跡第1次調査で検出された溝跡がさらに西側に延び、造山集落が立地する段丘にまで達しているのかどうか、その際、自然地形の起伏にかかわらず溝が掘削されているのかどうかを確認することを目的とした。図上で溝跡の位置を推定し、高位面ではN-3トレンチの西約60mの地点にN-4トレンチ、低位面では同じく西約140mの段丘直下にN-5トレンチを設定した。

調査の結果、両トレンチとも、溝跡各1条を検出した。溝跡の位置を図上で確認したところ、これまでに検出していた並行する2条の溝跡との関係では、高位面で検出したN-4・SD01溝跡が北側、低位面のN-5・SD02溝跡が南側の溝跡の想定位置と一致し、2条の溝跡が平行してほぼ東西に延びていることが分かった。低位面のN-5・SD02溝跡の確認面では須恵器破片がまとまって出土した。

## 2 検出遺構と遺物

### (1) N-3・SD01溝跡（第3・5図）

第1次調査で高位面に設定したN-3トレンチの南側、表土層直下の地山漸移層上面で検出した。東西方向の溝跡である。溝跡の上端幅は1m20cm、下端幅は90cm、長さ1m分を精査し、深さは検出面から47cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は水平だがやや凹凸がある。壁は底面から急角度に立ち上がり、上半部が大きく外反する。

埋土は、底面直上の10層、9層が黒色土で、層状に堆積する。開口状態で植物由来の腐植土が堆積したものと思われる。8層～6層は腐植土の堆積とともに壁上半の崩落による地山由来の砂や砂のブロックが混じる層、5層～2層は、6層より下の堆積層を掘り込んで溝の浚渫を行った後に堆積した層である。浚渫後の溝の底面は20～30m高くなる。5層～2層は埋め立て土である。

遺物は、埋土中から第5図1の須恵器坏のほか、内黒土師器坏、土師器甕の破片が出土した。第5図1の底面は、回転ヘラ切り後にナゲ調整を施している。酸化炎焼成で生焼けの須恵器で、色調は浅黄橙色である。

### (2) N-3・SD30溝跡（第3・5図、写真1）

第1次調査で高位面に設定したN-3トレンチの中央やや北側、表土層直下の地山漸移層上面で検出した。東西方向の溝跡である。溝跡の上端幅は80cm～1m、下端幅は90cm、長さ1m分を精査し、

深さは検出面から40cmである。断面形は逆台形を呈し、底面はやや南西側に傾斜し凹凸がある。壁は底面からやや開き気味に立ち上がり、途中で段状に上半部が外反する。

埋土は、9～7層が溝上部からの崩落土を含む流入堆積層、6層～3層は、7層より下の堆積層を掘り込んで溝の浚渫を行った後に堆積した層である、腐植土の堆積とともに壁上半の崩落による地山由来の砂礫が混じる。浚渫後の溝の底面は数cm高くなる。2層と1層は埋め立て土である。

遺物は、埋土中から第5図3～5の須恵器坏のほか、内黒土師器坏、土師器甕の破片が出土した。第5図3、5の底面は、回転ヘラ切り後にナゲ調整を施している。3は、酸化炎焼成で生焼けの須恵器で、色調は浅黄橙色である。4は、底部回転糸切り後に周縁部に回転ヘラケズリ調整を施している。焼成は堅緻、胎土は良好、色調は灰白色を呈する。

### (3) N-4・SD01溝跡 (第4図、写真2)

第2次調査で設定した高位面のN-4トレンチ中央部、トレンチ南端から約11m北側で検出した。東西方向の溝跡である。溝跡の南側は地山層上面、北側は地山漸移層上面で輪郭を確認した。溝跡の上端幅は90cm～1m10cm、下端幅は70cm、長さ1m60cm分を精査し、深さは55cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は水平であるが段状に南側がわずかに高い。壁は底面からやや開き気味に立ち上がり、上端近くで外反する。

埋土は、底面直上の12層が開口状態で植物根の影響を受けた部分、13層と11層～9層は、腐植土の堆積とともに壁上半の崩落による地山由来の砂や砂のブロックが混じる。8層～5層と4層～1層はいずれも下位の堆積層を掘り込んで溝の浚渫を行った後に堆積した層である。8層～5層には地山土が大量に混じることから、この地点では浚渫後に上部が崩落し、再度浚渫した溝に3層～1層の腐植土が堆積したものと思われる。浚渫では溝の底面付近まで掘り下げている。

遺物は出土しなかった。

### (4) N-5・SD02溝跡 (第4・6図、写真3)

第2次調査で設定した低位面のN-5トレンチ南側、トレンチ南端から約4m北側で検出した。東西方向の溝跡である。溝跡の南側は表土直下の地山層上面での検出である。北側は旧表土の黒褐色土面では輪郭がわずかに見えるものの不明瞭で、地山漸移層上面で明瞭な輪郭を確認した。溝跡の上端幅は95cm～1m10cm、下端幅は75cm～85cm、長さ1m分を精査し、深さは35cmである。断面形は逆台形を呈し、底面は平坦である。

埋土は、最下層の11層～9層が上部壁面の崩落土を含む暗褐色～黒褐色土、8層は開口状態で植物由来の腐植土が堆積したものである。7層～3層は、下位の堆積層を掘り込んで溝の浚渫を行った後に堆積した層である。植物由来の腐植土と、主に北側から流入した土が堆積する。浚渫では溝の底面付近まで掘り下げている。

遺物は、溝跡検出面から埋土1層・2層中にかけて須恵器破片がまとまって出土した。溝掘削後、自然埋没と浚渫を経た後で、溝に投棄されたものである。破片の多くは甕であるが、坏2点、坏蓋2点も含まれる。第6図3の須恵器坏は、底部回転糸切り後に周縁部に回転ヘラケズリ調整を施している。焼成は堅緻、胎土は良好、色調は灰白色を呈する。4の須恵器甕は、口唇部が方形の作りで直下に突帯を巡らす。5・6は、頸部に櫛歯状工具による波状文を施文する。8は、内面に複数種の当て具痕が明瞭に残る。

### 3 考察

#### (1) 溝跡の推定時期

溝跡からは、須恵器・土師器が出土した。そのうち、N-5・SD02溝跡では、検出面直下から一群の須恵器が出土した。これらはいずれも破片で、復元可能なものはなく、特定の器種・部位というわけでもない。出土位置は溝跡底面から約35cm上位である。溝跡上部が削平されているので、須恵器出土位置は、本来の溝跡の埋土中位になると推定される。溝掘削後、開口状態で腐植土層が形成されたり、上部が崩落したりしながら次第に埋没していき、溝を維持するための浚渫をした後もさらに埋没が進んで、三分の一から半分くらいの深さまで埋没した時点で、ひとまとまりの須恵器破片が投棄されたものと考えられる。

出土須恵器の中で最も生産年代の新しい破片が、投棄が行われた年代の上限を示すものではあるが、須恵器の生産年代が溝跡の掘削時期を示すものではないことは、注意を要する。

すなわち、出土した須恵器破片が投棄された時点で、すでに溝は埋まりかけているので、溝が掘削された年代はさらにさかのぼる。一方、出土した須恵器自体も生産された後、長短はあるものの、流通、使用・伝世の期間を経て投棄されたものであり、生産年代と廃棄年代には開きがある。溝が掘削されてから須恵器が出土した深さまで埋没する期間と、その須恵器自体が生産されてから投棄されるまでの期間は一定ではないので、出土須恵器の生産年代から溝掘削の年代を推定することは厳密にはできないのである。

現状では、出土須恵器の推定生産年代が8世紀中葉を主体とし、やや古いものが混じることから、須恵器投棄が8世紀中葉の年代幅の中、溝掘削はそれより10～20年程度さかのぼる頃と推定しておく。

#### (2) 溝跡の性格

溝跡内の埋土には、塀や柱列等の構造物を立てるために埋め戻したり、それらを撤去したような掘り返しの痕跡はない。水流による砂礫の堆積やラミナの発達も見られない。掘削後は、開口状態で腐植土が形成され、上部の崩落土や流入土が堆積しながら、ある程度の期間を経て次第に埋没していったと推測される。

2条の溝跡の延長は、南側の溝跡が259m以上、北側の溝跡が180m以上である。沖積地の低地に立地する東槻遺跡から、石持川を挟んで猫袋遺跡高位面、さらに低位面を経て段丘東縁直下まで、自然地形の起伏に影響されず一直線に東西方向に掘削されている。自然発生的、伝統的な地割りの境界溝ではなく、むしろそのような境界を無視して一直線に掘削されたと考えられる。著しい高低差や溝内埋土の状況から恒常的に水流のある水路でもない。

また、南北2条の溝の芯々の距離は、10mで一定である。2条のうち、北側のN-3・SD30溝跡と南側のN-5・SD02溝跡からは、出土地点が遠く離れているにもかかわらず、底部回転糸切り後に周縁部に回転ヘラケズリ調整を施す特徴的な須恵器坏が出土しており、2条の溝は、同時に開口し、機能していたと考えられる。

このような溝跡の特徴から、一对となる2条の溝跡は、大規模な道路の側溝と推定される。260m以上の距離にわたって、原地形にかかわらず10mの道幅を保持する直線道路であり、極めて計画的な

設計・施工であることがうかがえる。調査した地点では、後世の削平により道路面を検出していないが、側溝の深さが路面から約80cmと仮定すれば、溝跡検出面から25～45cm程度上位に路面の標高が想定される。

### (3) 8世紀の雄勝村の道路

猫袋遺跡と東槻遺跡で検出された10m間隔で平行する2条の溝跡が道路側溝であり、道幅10mの道路がほぼ東西方向に、一直線に260m以上も続いていたと推定した。このようなランドマークともいふべき大規模な構造物の建設は、設計、測量、施工等の技術的基盤を有する主体でなければ実現できない事業である。施工には莫大な労働力を必要とし、さらに、溝跡断面の土層に溝の浚渫を行った形跡も認められることから、竣工後も道路の維持のために相当の労働力が投入されたこともうかがえる。このような点から、この道路建設を行った主体は律令国家以外にはありえないと考える。

道幅10mという規格からは、律令国家が整備した駅路に匹敵する幹線道路であることが分かる<sup>(註2)</sup>。出羽国内陸部における8世紀代の幹線道路建設として想起されるのは、陸奥按察使兼鎮守將軍大野東人による天平9(737)年の陸奥出羽直路の建設である。

大野東人は、天平9(737)年2月25日、騎兵196人、鎮兵499人、陸奥国兵士5000人、帰服狄俘249人を率いて陸奥国府多賀城を出発し、3月1日、出羽国大室駅にて、出羽国兵士500人と帰服狄140人を率いて待っていた出羽守田辺難波と合流、3月11日に多賀城に帰着する前に、雄勝村から五十余里(約27km)の比羅保許山まで道路を建設した。しかし、雄勝村の俘長3人が田辺難波に対し官軍の雄勝村侵入について不安を訴え、田辺難波は大野東人を説得して雄勝村侵入を断念させた(史料①)。

#### 【史料①】

『続日本紀』天平9年4月14日条

(前略)

(二月)廿五日、將軍東人、從多賀柵發。(略)

四月四日、軍、屯賊地比羅保許山。先是、(正六位下出羽守)田辺(史)難波状僞、雄勝村俘長等三人來降、拜首云。承聞、官軍欲入我村。不勝危懼。故來請降者。(略)

難波議曰、發軍、入賊地、為教諭俘狄、築城居民。非必窮兵、殘害順服。若不許其請、凌壓直進者、俘等懼怨、走山野。勞多功少、恐非上策。不如示官軍之威、從此地而返。然後、難波訓以福順、懷以寬恩。然則、城郭易守、人民永安者也。

(後略)

田辺難波が主張する「①軍を發して賊地に入るは、②狄俘を教諭し、③城を築き、④民を居らしむ為なり。」は、④を郡制による通常の公民支配とすれば、雄勝村に対する律令国家側の政策を端的に示すものである。①が天平9年の直路建設であり、22年後の天平宝字3(759)年の③雄勝城造営と④雄勝、平鹿二郡の建郡により、概ね①～④の順番で実行された。

天平9(737)年春の陸奥国兵士による雄勝村における道路建設は中止されたが、『続日本紀』には、その後の経緯を推測できる記事がある(史料②・③)。

#### 【史料②】

『続日本紀』天平11年4月17日条

正六位上百濟王敬福授從五位下。正六位上田辺史難波外從五位下。

### 【史料③】

『続日本紀』天平11年4月21日条

陸奥国按察使兼鎮守府將軍大養徳守從四位上勲四等大野朝臣東人（略）為參議。

天平11(739)年4月17日、田辺難波は正六位上から外從五位下に昇叙され、その4日後に大野東人は參議に任じられ公卿に列せられた。これは、陸奥出羽直路建設の論功行賞と推測される。4月17日の記事は、昇叙の対象者が田辺難波と百濟王敬福の二人のみで、「正六位上百濟王敬福に從五位下を授く。正六位上田辺史難波には外從五位下。」という表記から、同一の功績による昇叙と見られる。百濟王敬福は、大野東人の陸奥出羽直路建設が行われた翌年、天平10(738)年4月に陸奥介に任じられており<sup>(註1)</sup>、大野東人のもとで田辺難波と共に直路建設を継続した功績が評価されたものと思われる。『続日本紀』の叙任記事をこのように解釈し、天平10年以降に雄勝村の俘狄とのトラブルの記載がないことも併せて考えると、中断した直路建設は、翌天平10(738)年には完成に至ったのではないかと推測される。

猫袋遺跡の溝跡を陸奥出羽直路の側溝とした場合、溝の掘削すなわち道路建設の年代は天平10(738)年、N-5・SD02溝跡から出土した須恵器は、8世紀半ばに道路側溝に投棄された破片で、その生産年代は8世紀中葉以前ということになる。出土須恵器の推定年代が調和的であることから、現時点では、猫袋遺跡で検出した溝跡を天平10(738)年に掘削された陸奥出羽直路の側溝と考えておきたい。

註1 猫袋遺跡の発掘調査報告書は、すでに次のとおり刊行されているが、調査結果を再検討したところ、報告書の記載とは異なる知見も得られたので、本資料はそれに基づいて作成した。

秋田県教育委員会 『払田柵跡―第153次調査・関連遺跡の調査概要―』 秋田県文化財調査報告書第519集 払田柵跡調査事務所年報2019 令和2(2020)年3月

秋田県教育委員会 『払田柵跡―第155次調査・関連遺跡の調査概要―』 秋田県文化財調査報告書第526集 払田柵跡調査事務所年報2021 令和4(2022)年3月

註2 中村太一 『日本古代の都城と交通』 324頁 令和2(2020)年10月15日 八木書店

註3 青森県史編さん古代部会 『青森県史 資料編 古代I 文献史料』 882頁 平成13(2002)年3月31日 青森県





写真 1

猫袋遺跡（第 1 次）  
N-3・SD30溝跡  
精査状況と断面土層  
（南東から）



写真 2

猫袋遺跡（第 2 次）  
N-4・SD01溝跡  
検出状況と断面土層  
（西から）



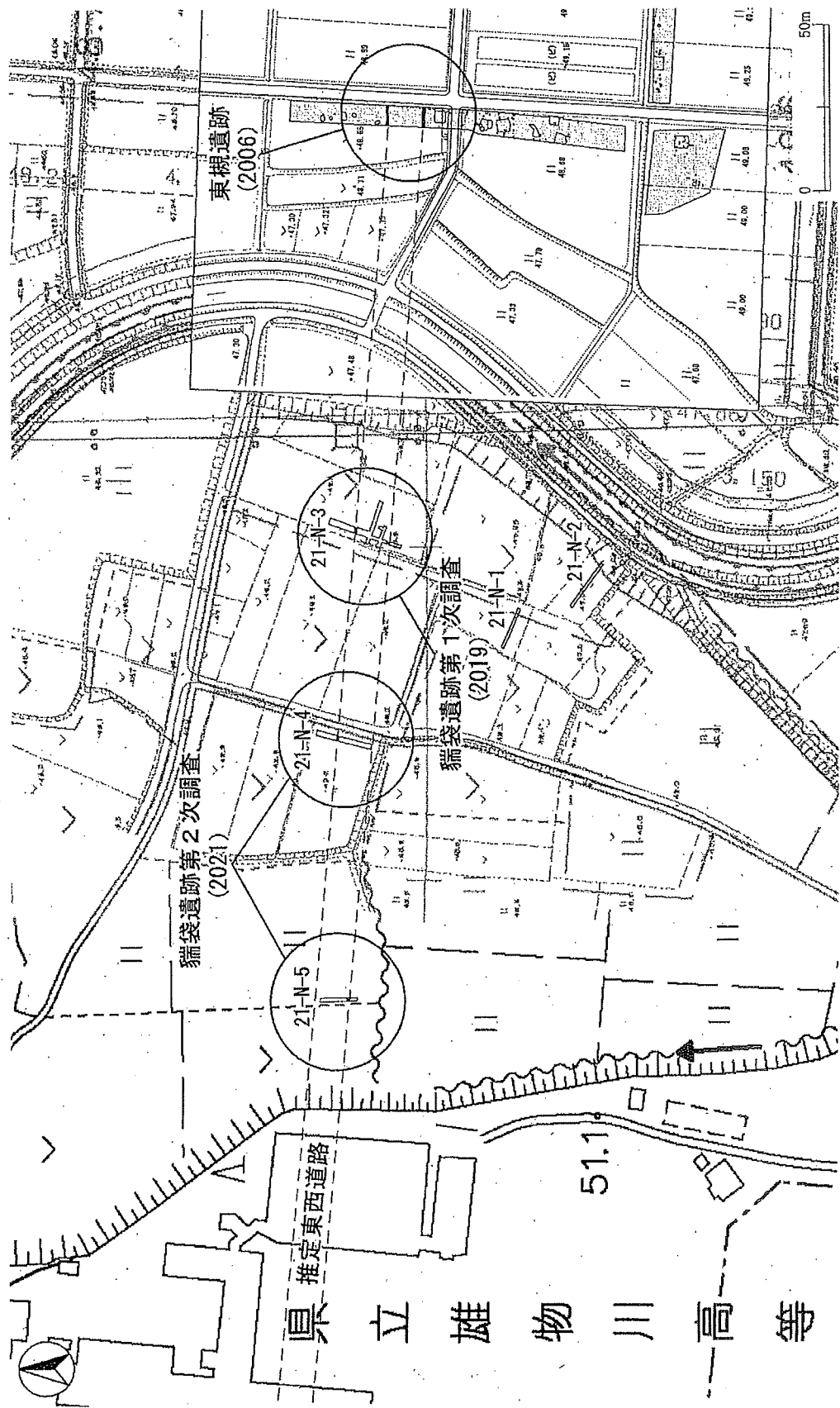
写真 3

猫袋遺跡（第 2 次）  
N-5・SD02溝跡  
検出面の遺物出土状況  
（北東から）

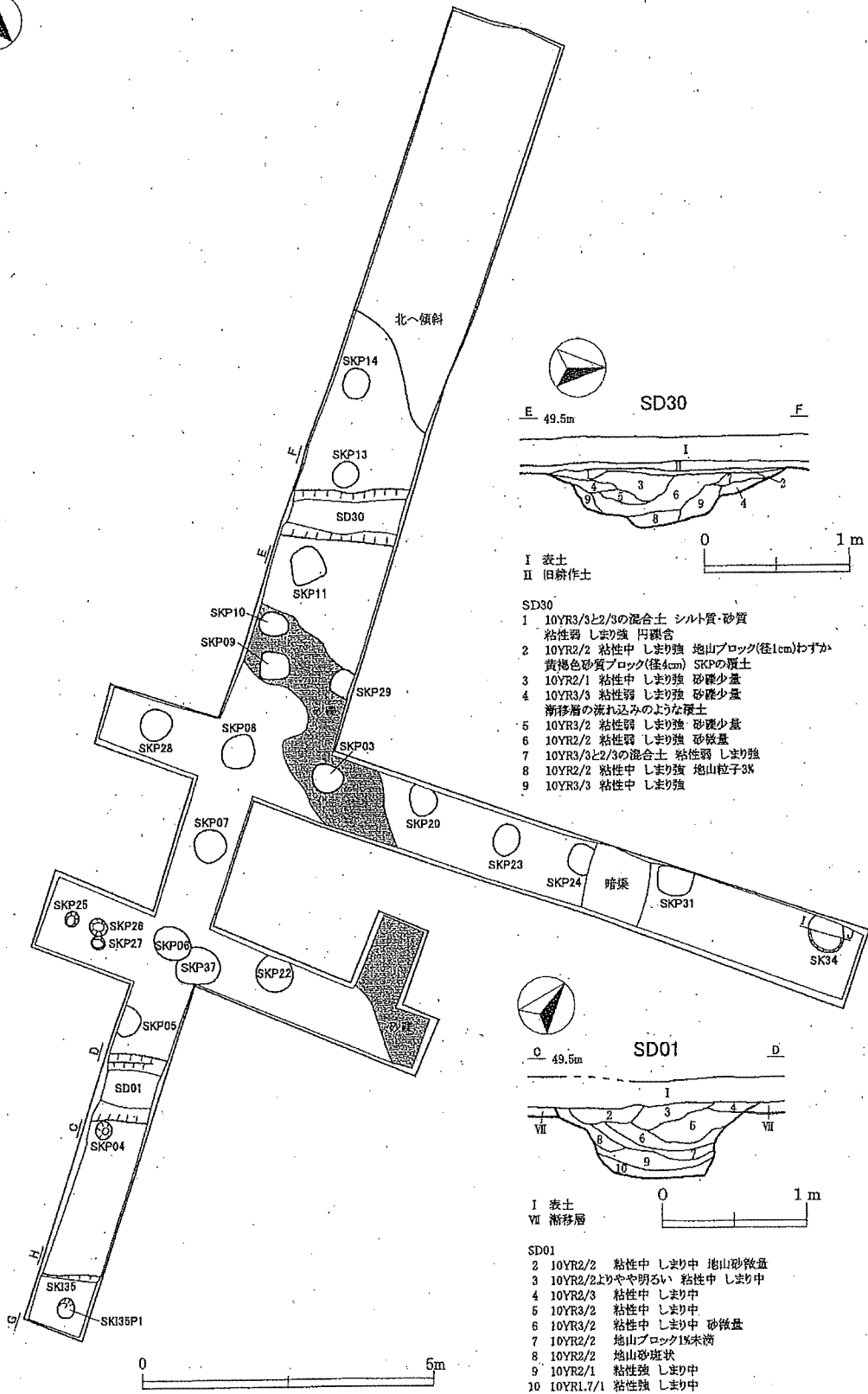


第1図 造山地区の地形と調査区

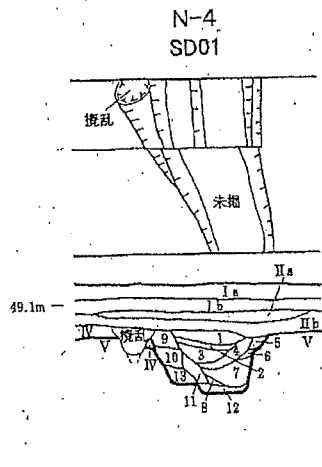




第2図 猫袋遺跡・東槻遺跡の溝跡検出位置図

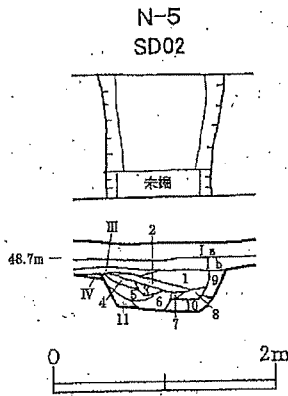


第3図 猫袋遺跡N-3トレンチ平面図と溝跡断面図



I a	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり弱	孔隙多 植物根多
I b	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり極めて強	地山土5%
II a	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性弱	しまり強	地山土の細砂30%
II b	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり強	地山土粒(径30mm以下)10%
					暗褐色土30%
IV	10YR4/4	褐色細砂質シルト	粘性中	しまり強	地山土40%
V	10YR4/6	褐色細砂	粘性弱	しまり強	

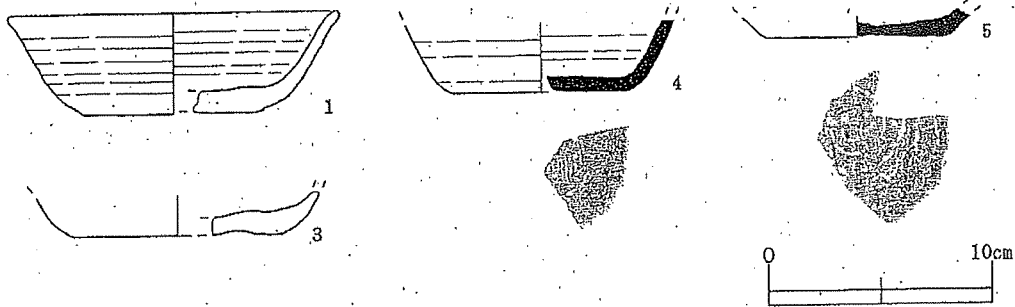
SD01					
1	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり強	地山土粒(径1mm以下)2%
2	10YR2/3	黒褐色粘土質シルト	粘性中	しまり強	地山土粒(径5mm以下)5%
3	10YR2/2	黒褐色粘土質シルト	粘性中	しまり強	地山土粒(径1mm以下)1%
4	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性弱	しまり強	地山土30% 細砂10%
5	10YR5/6	黄褐色細砂質シルト	粘性弱	しまり強	地山土のブロック
6	10YR4/4	褐色細砂質シルト	粘性弱	しまり強	暗褐色土30%
7	10YR3/3	暗褐色細砂質シルト	粘性弱	しまり中	地山土ブロック(径50mm以下)40%
8	10YR3/2	黒褐色細砂質シルト	粘性弱	しまり中	地山土20%
9	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり強	地山土粒(径1mm以下)5%
10	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり強	地山土ブロック(径20mm以下)30%
11	10YR3/3	暗褐色細砂質シルト	粘性弱	しまり中	地山土30%
12	10YR5/4	にぶい黄褐色細砂	粘性弱	しまり強	地山土に暗褐色土が20%混じる
13	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり強	地山土ブロック(径50mm以下)30%



I a	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまりなし	孔隙多
I b	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり強	地山粒(径10mm以下)5%
III	10YR2/1	黒色シルト	粘性中	しまり中	地山土5% 暗褐色土20%
IV	10YR4/4	褐色シルト質粘土	粘性強	しまり中	地山土40%

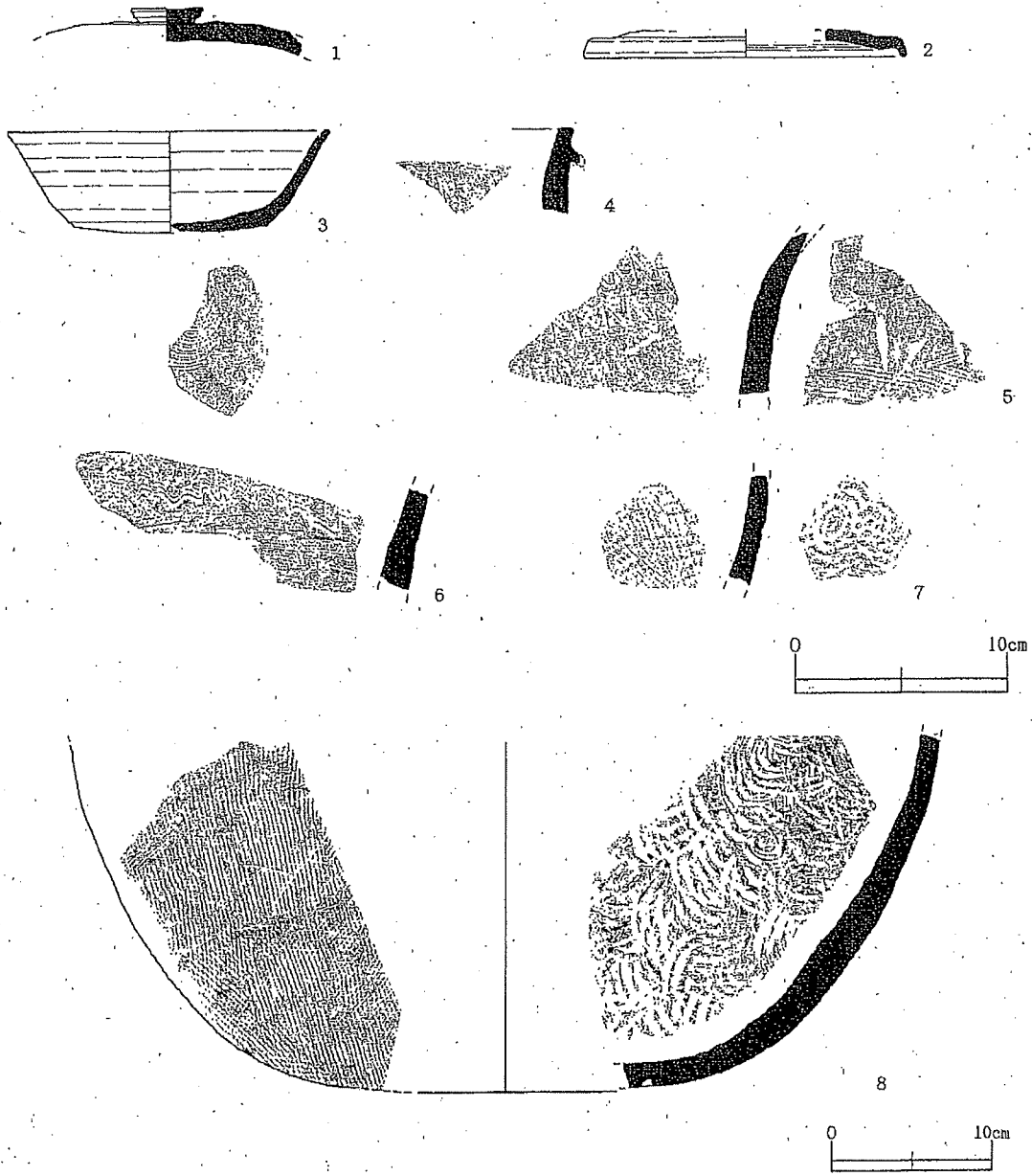
SD02					
1	10YR2/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	暗褐色10% 地山土粒(径3mm以下)2%
2	10YR2/3	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	細砂5% 地山土粒(径2mm以下)5%
3	10YR3/2	黒褐色粘土	粘性強	しまり中	地山土粒(径3mm以下)5%
4	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	地山土粒(径5mm以下)5%
5	10YR2/2	黒褐色粘土	粘性強	しまり中	地山土粒(径10mm以下)10%
6	10YR3/2	黒褐色シルト	粘性中	しまり中	地山土ブロック(径30mm以下)30%
7	10YR3/3	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	細砂20% 地山土ブロック(径30mm以下)20%
8	10YR2/2	黒褐色粘土	粘性強	しまり中	地山土粒(径3mm以下)5%
9	10YR3/4	暗褐色シルト	粘性中	しまり中	細砂5% 地山土30%
10	10YR3/2	黒褐色粘土	粘性強	しまり中	地山土ブロック(径30mm以下)20%
11	10YR3/4	暗褐色粘土	粘性中	しまり強	地山土40%

第4図 猫袋遺跡N-4、N-5トレンチの溝跡断面図



No.	出土地点・層位	種別	器種	調整等			口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	器高 (cm)	備考	
				外面	内面	底面						
1	SD01	N-3トレ	須恵器	坏	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	回転ヘラ切りナデ	(14.6)	(6.0)	-	4.4	生焼け、浅黄褐色、断面の中心は灰白色
3	SD30	N-3トレ	須恵器	坏	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	回転ヘラ切りナデ?	-	(9.4)	-	-	生焼け、浅黄褐色、摩滅著しい
4	SD30	N-3トレ	須恵器	坏	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	回転系切り 回転ヘラケズリ	-	(7.8)	-	-	灰白色
6	SD30	N-3トレ	須恵器	坏	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	回転ヘラ切りナデ	-	(6.0)	-	-	-

第5図 N-3トレンチSD01・30 溝跡出土遺物実測図



No.	出土地点・層位		種別	器種	円盤等			口径 (cm)	底径 (cm)	高台径 (cm)	器高 (cm)	備考
					外面	内面	底面					
1	SD02	N-5トレ 2層 N8.5m	須恵器	坏壺	つまみ:ヨコナデ 上面:回転ヘラ切り→ 回転ヘラケズリ、ヨコナデ	ヨコナデ	-	-	-	-	-	-
2	SD02	N-5トレ 2層 N8.5m	須恵器	坏壺	ヨコナデ	ロクロヨコナデ	-	(15.0)	-	-	-	-
3	SD02	N-5トレ 2層 N9.0m	須恵器	坏	ロクロヨコナデ	ロクロヨコナデ	回転糸切り→ 回転ヘラケズリ	(15.0)	(0.0)	-	4.5	灰白色
4	SD02付近	N-5トレ 排土中	須恵器	壺	ヨコヨコナデ→ 5本一組の樹指波状文	ヨコナデ	-	-	-	-	-	-
5	SD02	N-5トレ 2層 N8.9m	須恵器	壺	ヨコヨコナデ→ 4本一組3段の樹指波状文	ヨコナデ→ 横方向ハケ目	-	-	-	-	-	-
6	SD02	N-5トレ 2層 N9.2m	須恵器	壺	ヨコナデ→4本一組2段以上の 樹指波状文	カキ目→ヨコナデ	-	-	-	-	-	-
7	SD02	N-5トレ 2層 N7.9m	須恵器	壺	平行タタキ目(紐目痕あり)→ 一部ナデ	円心円文当て具痕	-	-	-	-	-	-
8	SD02	N-5トレ 2層 N8.7~9.0m	須恵器	壺	縦方向平行タタキ目→ 一部カキ目	弧状当て具痕→ 同心円文当て具痕	平行タタキ目	-	-	-	-	-

第6図 N-5トレンチSD02 溝跡確認面出土遺物実測図